

古都首里を掘る

【記念講演】

- 當眞嗣一（沖縄考古学会）
「古都首里の文化財保護と考古学の歩み」…………… 1

【基調講演】

- 島 弘（那覇市市民文化部）
「那覇市における埋蔵文化財調査とその保護をめぐる課題」…………… 11

【事例報告】

- 亀島慎吾・田村 薫（沖縄県立埋蔵文化財センター）
「ふたつの中城御殿跡－首里高校内と県立博物館跡地内の調査事例から－」…………… 17
- 玉城安明（那覇市市民文化部）
「城西小学校敷地内の発掘調査から見た『御細工所跡』」…………… 33
- 金城貴子（沖縄県立埋蔵文化財センター）
「円覚寺跡の発掘調査から見た古都首里の土地利用」…………… 43
- 樋口麻子（那覇市市民文化部）
「首里平良橋周辺遺跡発掘調査から考える古都首里」…………… 53

【誌上報告】

- 喜納大作（中城村教育委員会）
「首里古地図の史的検討」…………… 61
- 金城亀信（沖縄県立埋蔵文化財センター）
「県営首里城公園内 真珠道跡の発掘調査について」…………… 69
- 中尾智行（大阪府立弥生文化博物館）
「琉球王国の権衡資料」…………… 77
- 有銘倫子（今帰仁村教育委員会）
「首里城跡とその周辺遺跡から出土した文具」…………… 85
- 大堀皓平（沖縄県立埋蔵文化財センター）
「首里城跡周辺の遺跡より出土する玉器」…………… 91
- 森 達也（沖縄県立芸術大学）
「首里出土の清朝景德鎮官窯磁器」…………… 97
- 沖縄考古学会遺跡保存部会
「沖縄における遺跡保存運動の歩みと課題」…………… 105

【資料編－首里の埋蔵文化財】…………… 117

日 時：平成30年7月8日（日）12：30～16：50
会 場：沖縄県立芸術大学
首里当蔵キャンパス 一般教育棟 大講義室

はじめに

沖縄考古学会は、その設立趣旨の一つに「古代遺蹟および郷土文化財保護への積極的な協力」(『南島考古だより』1号)が掲げられ、これまで埋蔵文化財の保存に積極的に関わってきた。これまで本学会が取り組んできた遺跡保存活動については、南島考古だより100号に概要を紹介したほか、近年の状況については南島考古だより103号にも関連記事を掲載しているため、参照いただきたい。また、戦後の沖縄における文化財保護の歩みについては眞嗣一氏による総括があり(眞嗣 2015)、大変参考になるものである。

一方、これまで実施してきた遺跡保存要請活動の結果や、個々の遺跡の現状については、南島考古だより等では紹介できていない部分もあるため、以下ではこれまで保存要請活動を行った遺跡のうち、主だったものについてその経緯と現状についてまとめるとともに、近年の遺跡保存をめぐる現状と課題についても言及したい。

これまでの遺跡保存要請活動と遺跡の現状

これまで沖縄考古学会が行ってきた保存運動あるいは保存要請活動を表1に示す(南島考古だよりに掲載された関連記事を含む)。

表1 保存運動・保存要請活動一覧

年度	件名	備考	南島考古だより
1971-1972	浦添貝塚の保存運動	S47. 2県指定史跡	南島考古だより11・12号(S48. 11)
1974	仲泊貝塚群の保存運動	S50. 4国指定史跡	南島考古だより13号(S45. 7)
1976	「改正、沖縄文化財保護審議会設置条例案についての慎重審議を求める要請」		南島考古だより18号(S51. 7)
1980	「沖縄自動車道、石川～首里間予定路線内に存在する埋蔵文化財の保存について(要請)」		南島考古だより23号(S55. 11)
1981	「沖縄自動車道(石川～那覇) 予定路線遺跡の保存について要請」		南島考古だより24号(S56. 11)
1982	「首里城跡地域における首里タワー建設構想の反対についての要請」		南島考古だより26号(S57. 6)
1983	「沖縄自動車道(石川～那覇) 予定路線内の遺跡保存について(要請)」	H23. 12県指定有形文化財	南島考古だより28号(S58. 5)
1983	「史跡・埋蔵文化財保護強化に関する要請について」		
1984	「天山陵墓の保存運動で関係6団体と連携」		
1984	「未指定文化財に対する指定について」		南島考古だより30号(S59. 5)
1984	「牧港貝塚の保存についての要請」		
1984	「牧港貝塚保存一署名運動御協力御礼」	「保存不可能」回答書 南島考古だより36号	南島考古だより31号(S59. 11)
1986	「羽地番所跡の保存について(要請)」		南島考古だより35号(S61. 12)
1987	「湧田古窯の保存に関する要請」		南島考古だより36号(S62. 6)
1988	「沖縄市 室川貝塚の現地保存と活用に関する要請」		南島考古だより39号(S63. 9)
1989	「室川貝塚の保存問題とその後」		南島考古だより41号(H1. 9)
1989	「室川貝塚の保存要請」	H19. 2市指定史跡	南島考古だより42号
1989	「新石垣空港予定地並びにその近隣に所在する埋蔵文化財の保護に関する要望」		南島考古だより42号(H2. 6)
1990	「宇堅貝塚群の保存要請」		
1990	「喜如嘉貝塚の保存と活用に関する要望」		

表1 (続き)

年度	件名	備考	南島考古だより
1992	「那覇新都心開発整備事業に係る銘苅古墓群南地区(B・E地区)の保存と活用に関する要請」	H19.7国指定史跡	南島考古だより47号(H5.6)
1993	「県道24号線(具志川環状線)建設に係る江洲印部土手遺跡の保存と活用に関する要請」		南島考古だより48号(H5.10)
1993	「南山城跡の保存と活用に関する要請」		
1995	「八重山蔵元跡の保存活用に関する要請」		南島考古だより52号(H7.6)
1996	「勝連町平敷屋原遺跡破壊に関する抗議と要請」		南島考古だより54号(H8.6)
2001	「名蔵瓦窯跡の保存に関する要請」		南島考古だより67号(H13.10)
2011	「石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の適切な保存と活用を求める要望について」		南島考古だより90号(H23.6)
2013	「伊江村ナガラ原第三貝塚の適切な保存と活用について(要請)」		南島考古だより95号(H26.1)
2014	「首里高校敷地内における埋蔵文化財発掘調査の公開および遺跡の取り扱いについて(要請)」		南島考古だより98号(H27.4)
2014-2015	「首里高校内中城御殿跡の保存と活用について(要請)」		
2014	「遺跡保存活動の記録」		南島考古だより100号(H27.9)
2015	「城西小学校敷地内埋蔵文化財の取り扱いに関する要請(報告)」		南島考古だより102号(H28.6)
2015	「首里平良橋周辺遺跡の保存と活用に関する要請(報告)」		南島考古だより
2016	「近年の沖縄における遺跡保存の取り組みについて」		南島考古だより103号(H28.10)
2018	「首里当蔵旧水路の保存と活用に関する要請」		南島考古だより108号(H30.5)

1 浦添貝塚(浦添市)

浦添高校郷土史研究クラブによって1969年に第一次調査、1970年に第二次調査が行われた。特に、1970年の第二次調査で出土した南九州を中心に分布する縄文時代後期の市来式土器は、浦添貝塚の年代的位置づけを示す重要な発見であると同時に、先史時代における沖縄と九州との文化交流を実証したという点で、重要な意義をもつものである。

1971年秋に、浦添貝塚と近接する伊祖の高御墓が道路開設によって破壊されることが判明し、沖縄考古学会では理事会において貝塚の保存を要請していくことを採択した。また、高御墓の関係者とも連携し、保存運動を展開した。こうした動きを受けて、文化財保護委員会と建設局との間で保存に向けた調整が行われ、最終的には当初の計画を大幅に変更し、トンネル工法を採用することで浦添貝塚と伊祖の高御墓は保存されることとなった(新田1973、新田ほか2005)。現在は浦添大公園(ふれあい広場ゾーン)内に位置しており、案内板等も設置されている。



浦添大公園内の浦添貝塚と伊祖の高御墓

2 仲泊遺跡(恩納村)

沖縄縦貫道路建設に伴って、仲泊遺跡一帯がコーラル採掘および国道拡幅工事予定地となったため、国道拡幅予定地域内にある第三貝塚について、1974年3月8日から沖縄県教育委員会による緊急調査が行われた。その

結果、岩陰に営まれた風葬墓の下から焼土面や柱穴が検出され、縄文時代（貝塚時代）の住居跡であることが明らかとなった。また、近接して琉球王国時代に使用された比屋根坂の石畳が良好な状態で確認され、こうした成果を受けて、同年3月25日には沖縄考古学会が県に対して仲泊遺跡および比屋根坂の保存要請を行った。その後の経過は南島考古だより13号（沖縄考古学会1974）、恩納村博物館開館15周年記念「仲泊遺跡展」図録に詳しくまとめられている（恩納村博物館2016）。



仲泊遺跡の現地（写真奥）と標柱

沖縄考古学会だけでなく多くの団体が共同した保存運動の高まりを受けて、1974年4月17日には仲泊遺跡の保存が決定され、1975年4月には国の史跡指定を受けた。1975～1977年度には環境整備事業が行われ、1977年4月から史跡公園として一般公開されている（真栄城・金武1978）。

3 古我地原貝塚（うるま市）

沖縄自動車道の路線延長（石川ー那覇間）に伴って、1983～1984年にかけて沖縄県教育委員会による緊急調査が行われた。予定路線内には古我地原貝塚のほか、知花遺跡・竹下遺跡（沖縄市）、ヒニグスク（北中城村）、石嶺坂石敷道（中城村）、イシグスク（西原町）、拝山遺跡（浦添市）があり、トンネル工法によって保存されたヒニグスクを除く6カ所の遺跡は記録保存されることとなった（沖縄県教育委員会1987）。沖縄考古学会では1980～1983年にかけて、沖縄自動車道（石川ー那覇）予定路線内の遺跡について関係機関あてに保存要請を行っている。



古我地原貝塚調査後に建設された沖縄自動車道

調査終了後、調査区域は掘削され、沖縄自動車道が建設されている。

4 天山陵墓（那覇市）

首里池端町にある天山陵墓は、尚巴志または尚巴志王統のために造営された墓所であると伝えられる。1983年11月上旬、天山陵墓のある屋敷の所有者に住宅の新築計画があることがわかり、11月中旬に、沖縄県教育委員会による工事予定範囲（東室）の発掘調査が実施された（安里・盛本1984）。沖縄考古学会では球陽研究会をはじめとする関係学術団体と連帯して、同年12月行政当局に保存要請を行った。

現在天山陵墓は私有地となっており、一般公開はされていない。

5 牧港貝塚（浦添市）

洞穴およびその周辺の岩丘、岩陰部に形成された弥生～平安並行時代（貝塚時代後期）からグスク時代にかけての貝塚遺跡である。県道153号線のバイパス工事に伴って、1983～1984年にかけて沖縄県教育委員会による緊急調査が行われた。類例の少ない弥生～平安並行時代（貝塚時代後期）の洞穴遺跡であること、発掘調査によって多量の砂鉄が検出されたこと（沖縄県教育委員会1985）を受けて、沖縄考古学会では1984年3月に関係機関に対して遺跡の保存を要請し、1984年9月には保存を求める949名の署名を沖縄県知事あてに提出した。

その後、県道153号線バイパスの建設工事に伴って、遺跡の存在した岩丘部一帯が掘削、除去されたため、現

在では遺跡の状況を確認することはできない。

6 羽地番所跡（名護市）

県営仲尾地区土地改良事業に伴って、1985～1986年に名護市教育委員会による発掘調査が実施された。その結果、中国産陶磁器やグスク土器などが出土したほか、番所の石垣遺構の一部が確認され、門の位置も把握された。また、遺跡周辺には、神道を軸として北の勘定納港から親川グシク、御殿屋敷、羽地間切番所、神所屋敷、アプハミヌミヤ、田井等アサギといった遺跡が連なり、学術的にも地域住民にとっても重要な地域となっていることから、沖縄考古学会では1986年7月に名護市長、名護市教育長あてに羽地番所跡の保存要請を行った。こうした動きを受けて、羽地間切番所は土地改良区から除外され、保存されることとなった（名護市教育委員会1988）。

現在遺跡現地は原野となっており、遺跡の所在を示す標柱が設置されている。

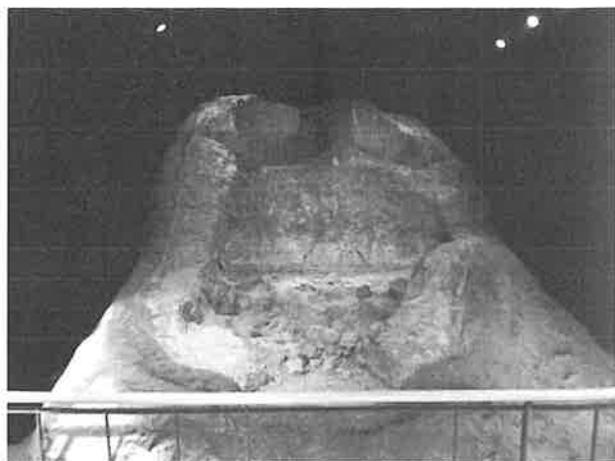
7 湧田古窯（那覇市）

湧田古窯は陶器や瓦などを焼いた窯で、1616年に沖縄に製陶業を伝えた朝鮮人陶工が窯場を開いた場所である。遺跡は沖縄県新庁舎建設に伴って確認された。事前の調整がなされないまま工事が先行し、地下の掘削によって夥しい量の瓦片が掘り出されたことから、遺跡の存在が明らかになり、発掘調査が行われることになった。1986～1987年にかけて沖縄県教育委員会による緊急調査が実施された。調査の結果、湧田古窯跡は県庁舎敷地の全域に広がっており、作業場、粘土取り場、窯、不良品廃棄場、製品置場等が確認され、窯場工房の様子が立体的に把握できることが明らかとなった。また、出土品はコンテナ総数933箱と膨大な量にのぼった（沖縄県教育委員会1993）。

こうした成果を受けて、沖縄考古学会では、1987年3月に沖縄赤瓦事業協同組合ほか11団体と連携して湧田古窯の保存に関する要請を関係機関あてに実施した。その後、関係部局による調整の結果、現地保存は困難との判断が下され、1～3号窯は切り取り保存された。現在、1号窯は沖縄県立博物館・美術館、2号窯は那覇市壺屋焼物博物館にて一般公開されている。また、遺跡現地にあたる沖縄県庁行政棟南側には、湧田古窯の案内板が設置されている。



県庁行政棟南側に設置された湧田古窯の案内板



切り取り保存後公開された湧田1号窯
(県立博物館・美術館)

8 室川貝塚（沖縄市）

1970年代に沖縄国際大学による発掘調査が行われ、多くの土器、石器、骨・貝製品が出土し、縄文時代前期から晩期に至る複合遺跡であることが明らかとなった。また、本貝塚出土土器にもとづいて、高宮廣衛氏によって室川下層式や室川上層式、室川式が設定された。

1980年代には遺跡周辺において沖縄市総合庁舎建設が計画され、沖縄考古学会では1984年4月に室川貝塚の

文化財指定を関係部局に要請した。その後、遺跡の保存をめぐって関係部局間で協議が重ねられ、沖縄考古学会でも1988年7月、1989年10月に保存要請を行った。最終的に貝塚本体部を室川貝塚歴史公園として保存する一方、これに隣接する崖下地区、東地区は記録保存されることとなった。1989年には沖縄市教育委員会による範囲確認調査が実施され、1989～1990年にかけて東地区、崖下地区の緊急調査が実施された。また、崖上に位置する馬上原遺跡も合わせて記録保存されることとなった。この間の経緯は緊急調査報告書の附録「総合調査建設に伴う室川貝塚一帯の事前協議経過」（沖縄県教育委員会1993）として詳しくまとめられている。

現在、室川貝塚本体部は室川貝塚歴史公園として整備されており、1997年には近隣の室川井とともに市史跡に指定されている。



室川貝塚歴史公園と沖縄市総合庁舎

9 宇堅貝塚群（うるま市）

土地改良事業に伴って1979年に具志川市教育委員会による発掘調査（A・B地区）が行われ、弥生土器、鉄斧、砥石、ガラス玉などの弥生系遺物がセットで確認された（具志川市教育委員会1980）。その後、1989～1990年にかけて沖縄電力の火力発電所建設に伴う緊急調査が具志川市教育委員会によって実施され、弥生土器などとともに銅鏡（後漢鏡）や銅鏃（漢式三翼鏃）が出土した。

こうした成果を受けて、沖縄考古学会では1990年2月に、関係部局に対して宇堅貝塚群の保存要請を行った。その後、発電所敷地内での建物配置の変更などが協議され、調査された遺跡の一部は保存されることとなった。



宇堅貝塚（C地区）のある砂丘（写真中央奥）と沖縄電力の火力発電所（奥）

10 喜如嘉貝塚（大宜味村）

弥生～平安並行時代の遺跡であり、1978年には範囲確認を目的とした発掘調査が行われた（大宜味村教育委員会1979）。その後、国道58号整備の計画が持ち上がり、喜如嘉貝塚がその敷地内に含まれる可能性があることから、沖縄考古学会では、1990年3月に喜如嘉貝塚の保存と活用に関する要望を大宜味村長および教育長あてに行った。関係機関による調整の結果、新たな国道の路線は海岸沿いのルートに決定したことから、改修工事の範囲に係る部分について、1992～1993年に沖縄県教育委員会による緊急調査が行われた。調査後は国道58号改修工事が実施された。遺跡の主要部分は国道南側に保存されており、遺跡の案内板も設置されている。

11 銘苺墓跡群（銘苺古墓群）

銘苺墓跡群は那覇新都心に位置する大規模な墓跡群で、グスク時代から近世、近代にかけて営まれた。一帯は戦後米軍の住宅施設として使用されていたが、1987年に全面返還された。その後、214haにおよぶ返還地の区画整理事業に伴って、1990～1992年にかけて那覇市教育委員会による緊急調査が行われた。

銘苺墓跡群および隣接するヒヤジョー毛遺跡の重要性と、現地保存に至る経緯については、金武正紀氏による詳細なまとめがある（金武1995）。那覇市文化財調査審議会や沖縄民俗学会、沖縄考古学会の保存要請や陳情、

市民の声を受けた行政内部のねばり強い調整の結果、遺跡の一部（3600㎡）は現地保存されることとなった。その後、2007年7月には国史跡に指定された。

当初、遺跡の保存と合わせて文化施設を遺跡近隣に建設し、遺跡の整備、保存、活用を行う計画であったが、現在まで実現されていない。国史跡の一部である伊是名殿内の墓については一般公開され、案内板も設置されているが、銘苅川北岸の29基の墓跡の整備・活用は今後の課題となっている。



銘苅墓跡群（銘苅川北岸の墓跡群）



銘苅墓跡群（伊是名殿内の墓）

1 2 江洲印部土手遺跡（うるま市）

周囲を見渡す高台の上にあり、琉球王国時代の土地測量図根点として設置された印部石と、その周囲を囲む二重の円形状石列からなる。印部土手まで含めて印部石が保存されている例は、県内でも十数カ所程度と言われており、当時の状態がほぼ完全な形で残されている点で稀有なものである。

県道224号線（具志川環状線）建設工事に伴って具志川市教育委員会（当時）による調査が行われ、調査成果を受けて沖縄考古学会では1993年7月に関係機関あてに江洲印部土手遺跡の保存と活用に関する要請を行った。こうした動きを受けて、224号線は江洲印部土手遺跡に係る部分について、トンネル工法が採用され、遺跡は現地に保存されることとなった。

現在遺跡は、県道224号線のトンネル上部に保存されており、案内板も設置されている。



トンネル工法によって保存された江洲印部土手遺跡

1 3 南山城跡（糸満市）

南山城跡は三山時代（14世紀頃）に栄えたグスクで、広く県民の間に知られた著名な遺跡である。大正4年に学校敷地整備工事が行われ、現在遺跡の大半は高嶺小学校の敷地となっている。1984年には校舎改築に伴う緊急

調査が糸満市教育委員会によって行われ、中国産陶磁器やグスク系土器のほか、備前焼、鉄鏃、ガラス製勾玉などが出土した（糸満市教育委員会1984）。その後、1985年2月には市の史跡に指定された。遺跡の重要性に鑑み、積極的な保存と活用が望まれることから、沖縄考古学会では、1993年9月に南山城跡の保存と活用に関する要請を糸満市長、糸満市教育長あてに実施した。

現在南山城跡の大半は高嶺小学校敷地内となっているが、遺跡に関する案内板が設置され、糸満市教育委員会による保存と活用に向けた調査も行われている。



南山城跡の石積み

14 八重山蔵元跡（石垣市）

沖縄県八重山支庁建築に伴って、1994～1995年にかけて石垣市教育委員会による緊急調査が実施された。その結果、石積みや礎石といった蔵元の遺構が良好な状態で検出され、多数の陶磁器等の遺物が出土した。また、隣接する砂丘遺跡からは蔵元設置以前の15～16世紀の埋葬人骨群が検出された。沖縄考古学会では、遺跡の重要性に鑑み1995年1月に県知事、教育長に対して遺跡の保存活用に関する要請を行った。八重山文化研究会や地域住民からも保存要請が行われ、こうした動きを受けて関係部局において保存に関する協議が行われた結果、新庁舎建設地は変更され、遺跡現地は保存されることとなった。現在、遺構は地下に埋め戻されているが、現地には石積みが再現されているほか、案内板が設置されている。



八重山蔵元跡の再現された石積み

15 平敷屋原遺跡（うるま市）

縄文時代晩期の遺跡であり、1991年に行われた個人住宅建設に伴う発掘調査では、竪穴住居2基が検出され、多数の土器片等が出土した（勝連町教育委員会1991）。1996年1月、米軍気象観測レーダー施設工事によって遺跡の一部が破壊されたことを受けて、沖縄考古学会では1996年4月に、第18航空団司令官および在沖米海軍艦隊活動司令部に対して抗議と要請を行うとともに、那覇防衛施設局と沖縄県知事へ軍用地内の文化財の取り扱いについて要請を行った。こうした動きを受けて、同年6月には基地内における文化財の調査及びその保存に関する要請が沖縄県教育長より在沖米軍総領事と那覇防衛施設局に対してなされ、県も「The destruction of cultural properties inside the U. S. military bases」と題した小冊子を作製し、大田昌秀県知事（当時）がアメリカ政府に対して要請を行った（眞眞2015）。この平敷屋原遺跡の破壊とその後の抗議・要請の動きは、米軍基地内の埋蔵文化財の取り扱いをめぐる大きな問題を提起した事件であった。

16 名蔵瓦窯跡（石垣市）

17世紀末から18世紀前葉にかけて操業された瓦窯跡で、2000年に石垣市教育委員会によって発掘調査が実施された。調査の結果、瓦窯一基が確認され、焚口周辺から煙道部までの瓦窯の構造雄が明らかになったほか、周辺からは大量の瓦類や陶器片が出土した。こうした成果を受けて、沖縄考古学会では2001年4月に石垣市教育

長に対して遺跡の保存に関する要請を行った。調査後、窯跡は地中に埋め戻され、保存が図られている。現在、現地は畑地となっている。

17 白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）

新石垣空港建設予定地内に所在する洞穴遺跡であり、新石垣空港建設工事に伴って2010年に沖縄県立埋蔵文化財センターによる緊急調査が実施された。その結果、グスク時代相当期、無土器期、下田原期、完新世初頭、最終氷期最盛期の各時期の包含層および堆積層からなる複合遺跡であることが確認された。遺跡の重要性に鑑み、日本人類学会、九州旧石器文化研究会、中・四国旧石器文化談話会、日本考古学協会より遺跡の保護と調査に関する要望が関係機関に提出され、こうした動きを受けて関係部局において調整が行われた結果、遺跡部分は現地に保存されることとなった。沖縄考古学会では、2011年4月に白保竿根田原洞穴遺跡の適切な保存と活用を求める要望を関係機関あてに提出した（沖縄県立埋蔵文化財センター2013）。

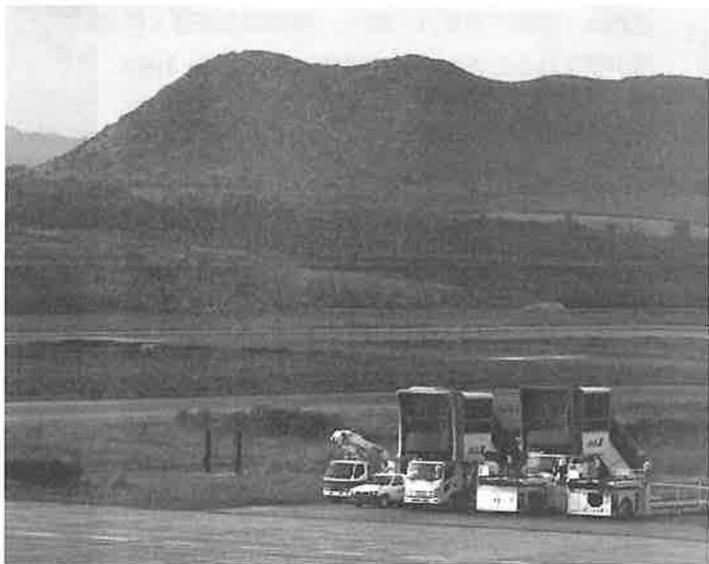
その後、2012～2016年にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターによる範囲確認調査が行われた。最終的には後期更新世の層（24000～16000BP）を中心に約1100点の人骨（十数体分）が出土したが、後期更新世層からは明確な人工遺物は確認されていない

現在遺跡は、新石垣空港（南ぬ島 石垣空港）の敷地内に二重のフェンスを設け、空港外からのアクセスを確保した状態で保存されている。遺跡へ入場するためには、現時点で2箇所のゲートを通過する必要があり、それぞれが個別の南京錠で施錠されている。このカギの管理は石垣市教育委員会文化財課、石垣空港管理事務所、八重山土木事務所が行っている。遺跡へ立ち入る際は、これらの機関に入場申請を行っている旨を伝え、カギを借用する必要がある（沖縄県立埋蔵文化財センター2017）。

18 ナガラ原第三貝塚（伊江村）

縄文時代後期から弥生時代並行期にかけての複合遺跡であり、県営農地保存整備事業（川平第2地区）に伴う浸透池建設に伴って、2013年に伊江村教育委員会による緊急調査が実施された。その結果、多数の遺物とともに縄文時代後期の層から炉跡17基、竪穴住居跡2基等の遺構が検出され、さらに縄文時代後期層の直上から石棺墓を含む3基の埋葬遺構、弥生時代並行期の層からイモガイ集積遺構1基が検出された。また、石棺墓内からはゴホウラ製貝輪を左腕に装着した保存良好な人骨が埋葬された状態で検出され、沖縄初のゴホウラ製貝輪装着例として注目された。こうした成果を受けて、沖縄考古学会では、2013年9・10月

に関係機関に対してナガラ原第三貝塚の保存と活用に関する要請を行った。要請を受け、関係部局において遺跡



新石垣空港の浸透ゾーン内に二重フェンスで保存された白保竿根田原洞穴遺跡（写真中央）



ナガラ原第三貝塚の現地と浸透池

の保存に関する協議が行われた結果、浸透池の設計変更が行われ、調査区西側において検出された石棺墓、竪穴住居跡、イモガイ集積遺構等の遺構群について、保存されることが決定した（伊江村教育委員会 2017）。この間の経過の詳細は南島考古だより 96 号に掲載されている。

現在遺跡現地には浸透池が設置されているが、調査地西側の遺構群は地下に埋め戻して保存されており、案内板が設置されている。

19 首里高校内中城御殿跡

首里高校校舎改築に伴って、2013～2015 年にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターによる緊急調査が実施された。中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、近世初期に現首里高校敷地内に創建され、1875（明治 8）年に那覇市首里大中町の龍潭池の北側（旧県立博物館敷地内）に移転した。調査の結果、グスク時代、近世、近代～現代に至る複合遺跡であることが確認され、グスク時代の柱穴や石組土坑、近世の中城御殿に関連する石積みや井戸など、多種多様な遺構及び遺物が検出された。

また、遺跡に隣接して玉陵や首里城跡、園比屋武御嶽石門等の世界遺産が存在していることから、沖縄考古学会では 2014～2015 年にかけて数度にわたって関係機関に対して遺跡の保存と活用に関する要請を行った。また当学会と連携して、日本考古学協会からも遺跡の保存と活用に関する要望が関係機関あてに提出された。

こうした動きを受けて、2015 年 10 月 8 日に開催された沖縄県議会 9 月定例会文厚委において、現地保存案に基づく処理方針について再審議があり、処理方針が採択された。これを受けて校舎改築の設計変更が行われ、関係部局において校舎の安全性を確保しつつ、遺構への影響が最小限となる工法の検討が重ねられた。この間の経過については発掘調査報告書（沖縄県立埋蔵文化財センター 2017）および南島考古だより 98 号、103 号に詳しく記載されている。

実施設計完成後、校舎建設工事は着工された。発掘された遺構は現在校舎の下に埋め戻され、盛土による保存が図られているが、基礎工事、基礎杭による影響が懸念される。

遺跡保存をめぐる現状と課題

以上、これまで本学会が保存要請を行った遺跡について、経緯と現状をまとめてみた。

個々の遺跡の内容を見ると、1980 年代以前の遺跡保存活動は、主として縄文時代（先史時代）の遺跡が対象となっていたが、1990 年代以降は対象となる遺跡の年代的広がりが増え、中近世、さらに近代まで利用された遺跡も対象となっている。こうした傾向は、沖縄における埋蔵文化財の取り扱いをめぐる状況と軌を一にしたものと言えよう。

保存運動を受けて、最終的に現地保存が決定された例として、浦添貝塚、仲泊貝塚、羽地番所跡、江洲印部土手遺跡、八重山蔵元跡、名蔵瓦窯跡、白保竿根田原洞穴遺跡などがあげられる。また、室川貝塚、宇堅貝塚、喜如嘉貝塚、銘苅墓跡群、ナガラ原第三貝塚、首里高校内中城御殿跡などでは、関係部局によるねばり強い協議の結果、一部が保存されることとなった。ただし史跡指定まで進展したものは浦添貝塚、仲泊貝塚、銘苅墓跡群や室川貝塚など一部に限られており、保存が決定された遺跡についても依然危うい状態にあると言える。また、ナガラ原第三貝塚や首里高校内中城御殿跡などでは、保存地区の直上、または直近に施設が建設され、保存された遺構を直接的に活用することは難しい状態にある。開発行為への対応として当座の保存が図られた事例について



首里高校の旧校舎（左）と新校舎（右）

も、さらなる学術的、社会的価値を掘り下げていく必要があり、個々の事例に即した取り組みが求められよう。



首里中学校隣接地に保存されたワンドゥーガー（椀洞井戸）



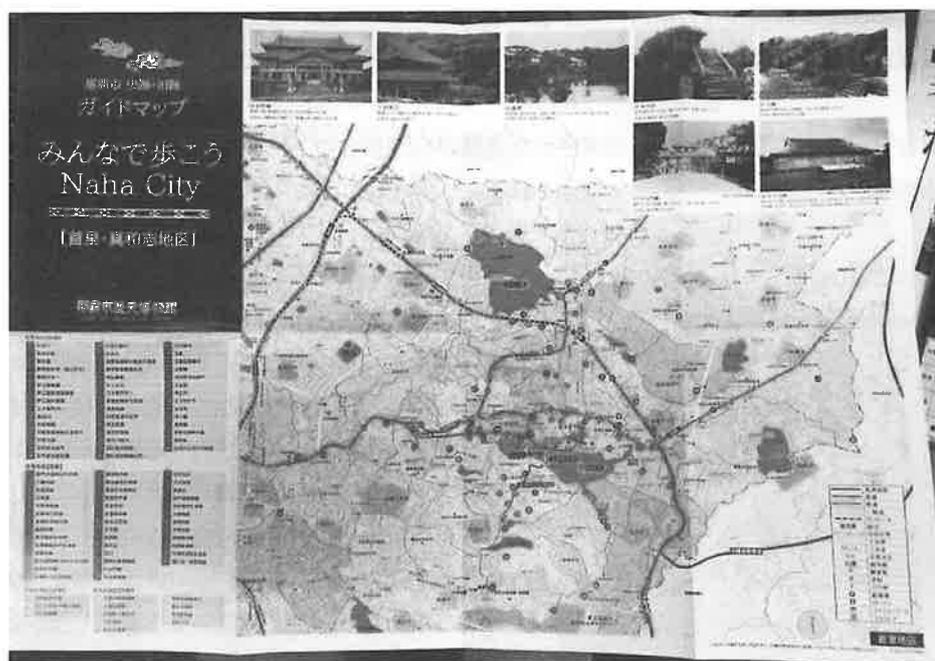
歩道拡幅に伴って移設された中城御殿（旧県博）の石積みと保存された井戸



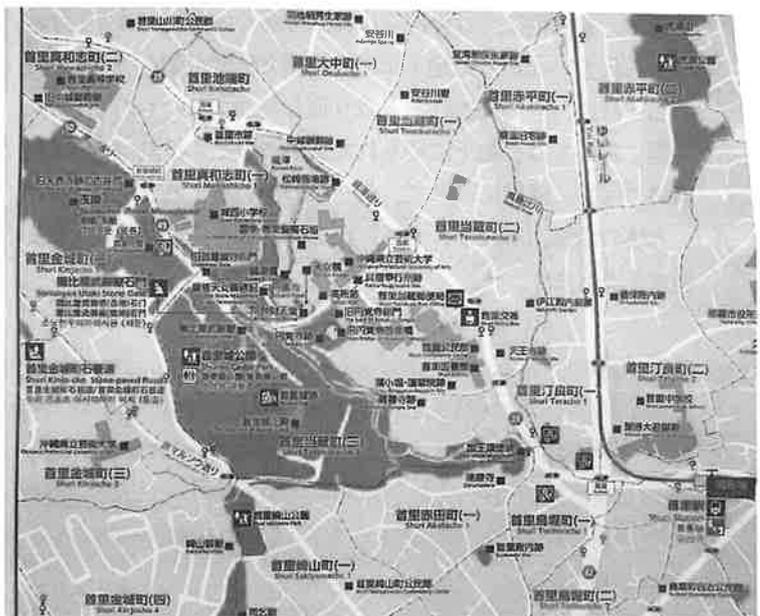
大美御殿跡（現首里高校）の案内板



室川貝塚歴史公園に設置された室川貝塚の案内板



那覇市歴史博物館作成のガイドマップ（首里・真和志地区）



沖縄都市モノレール首里駅の周辺観光案内図



沖縄県（都市計画・モノレール課）・沖縄都市モノレール（株）作成の観光パンフレット

保存された遺跡を活用するためには、何らかの形で整備を行う必要があるが、この点についても課題は山積している。標柱や案内板の設置といった初歩的な整備がなされているものは比較的多いが、経年劣化によって案内板が読み取りづらい、あるいは読めないものも出てきている。さらに進んだ整備が行われている例として、浦添貝塚、仲泊貝塚、室川貝塚、銘苅墓跡群の伊是名殿内の墓などがあげられる。これらの事例では、いずれも史跡公園として系統的な整備が行われている。発掘成果の活用という点では、検出された遺構の展示公開は理想的だが、高温多湿な沖縄では技術的に困難な点も多い。遺跡の周知をはかる上では、各地域ごとの文化財保護計画や都市計画との連携も急務と言えよう。遺跡現地への標柱や案内板の設置とともに、地域の文化財に関するリーフレットの作成や、公共地図への掲載も有効な手段と考えられる。また近年では一部地域において歴史ガイドなどへの活用も積極的に進められているが、観光への活用という側面が強いようである。

2000年の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産登録は、戦後沖縄の文化財保護史上、大きな画期であったと言える。これを機に、遺跡の重要性に関する周知がはかれると同時に、沖縄観光への積極的な活用が進められることとなった。一方、年々増加する観光客は、沖縄経済への寄与ばかりでなく、遺跡への負荷という点ではマイナスの影響を及ぼしていることも事実である。世界遺産を構成する資産の一つである斎場御嶽では、2012年度から聖地としての静寂さを確保し、マナー向上や自然保護を考慮する機会とするため年2回の休日

を設けている。遺跡の保存と活用について、均衡のとれたあり方を模索していく必要がある。

近年、首里地区では再開発に伴って多くの発掘調査が行われている。公共施設や街路の整備に伴って、それまで知られていなかった地下に眠る埋蔵文化財が姿を現すことも多い。遺跡は過去の歴史を物語る重要な証人であると同時に、一度失われると取り返しがつかないものでもある。特に沖縄戦によって多くの歴史的遺産を失った沖縄においては、地下に埋もれた遺跡の果たす役割は大きい。この点を改めて認識するとともに、本稿が今後の遺跡の保存、活用について、何らかの形で益するところがあれば幸いである。

本稿の執筆にあたり、会員諸氏よりさまざまにご教示ならびに情報提供をいただきました。末筆ながら記して謝意を表します。

参考文献

- 安里嗣享・盛本勲 1984 「天丘陵跡調査の概略」『紀要』第1号 沖縄県教育委員会文化課
- 伊江村教育委員会 2017 『カヤ原遺跡 A 地点・ナガラ原東貝塚・ナガラ原第三貝塚』
- 石垣市教育委員会 1997 『蔵元跡発掘調査報告書』
- 糸満市教育委員会 1984 『南山城跡第一次緊急発掘調査概要』
- 沖縄県教育委員会 1985 『牧港貝塚・真久原遺跡』
- 沖縄県教育委員会 1987 『古我地原貝塚』
- 沖縄県教育委員会 1993 『湧田古窯跡 (I)』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 『白保竿根田原洞穴遺跡』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『白保竿根田原洞穴遺跡—重要遺跡範囲確認調査報告書2 総括報告編』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『中城御殿跡 (首里高校内)』
- 沖縄考古学会 1974 「文化財保存問題特集 (2)」『南島考古だより』第13号
- 沖縄市教育委員会 1993 『室川貝塚—総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告』
- 沖縄市教育委員会 1997 『室川貝塚—沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書。』
- 恩納村博物館 2016 『国指定40周年記念 恩納村博物館開館15周年記念 仲泊遺跡展—時代と共にあゆむ遺跡の歴史—』
- 勝連町教育委員会 1991 『平敷屋古島遺跡発掘調査報告書』
- 金武正紀 1995 「銘苅古墓群とヒヤジョー毛遺跡の保存について」『南島考古』No.15
- 具志川市教育委員会 1980 『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』
- 眞眞嗣一 2015 「第3章 文化財保護」『沖縄近・現代の考古学』琉球書房
- 名護市教育委員会 1988 『県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書』
- 新田重清 1973 「浦添貝塚の保存をめぐって」『南島考古だより』11・12号
- 新田重清・比嘉賀盛・島袋春美・仲座久宜 2005 「浦添貝塚—第一・二次発掘調査のまとめ」『沖縄県立博物館紀要』第31号
- 眞栄城徳鋭・金武正紀 1978 「史跡仲泊遺跡環境整備報告」『仲泊遺跡 1977 年度発掘調査報告書・環境整備報告書』恩納村教育委員会

沖縄考古学会 2018年度 研究発表会 資料集

古都首里を掘る

2018 (平成30) 年 7 月 8 日発行

発行：沖縄考古学会

代表 眞 嗣一

編集 山崎 真治・吉田 健太

亀島 慎吾

〒903-0213 沖縄県西原町字千原1番地
琉球大学法文学部考古学研究室気付
TEL：098 (895) 8276

印刷：株式会社 国際印刷

〒901-0147 沖縄県那覇市宮城1丁目13番9号

TEL：098 (857) 3385
